

自然や環境, 地域, 人との関わりを基盤とした学習活動の展開*

～ESDの考え方を取り入れた, カリキュラムの再構築をととして～

跡部英行**・島野智之***

Restructuring of the Curriculum based on ESD in the Hiyoshidai Elementary School
of Tomiya City, Miyagi
- Environment, Nature, Local Society and Human Relationships -

Hideyuki ATOBE and Satoshi SHIMANO

要旨: 本校は, 平成22年度にユネスコスクールの認定を受け, 教育活動全体の中にESD(持続発展教育)の視点を位置付けることになった。この趣旨に則った教育活動を行うために, 新たなカリキュラムを作成するのではなく, これまで行ってきた教育実践にESDの考え方を取り入れ, 内容の見直し・再構築を行った。それをもとに, 教育資源の教材化・教材開発でのプランニング・各教科との関連とのバランスを取りながら, 総合的な学習の時間を中心に研究・実践を行った。

キーワード: ESD, カリキュラム, ユネスコスクール

1. はじめに

本校は, 仙台市の北部に位置し, 昔ながらの街並みを残すものの新興住宅地が地域の大半を占めている。近くに北蔵王から連なる船形山・泉ヶ岳があり自然環境にも恵まれている。こうした恵まれた地域環境を活かし, これまで総合的な学習の時間を中心に, 自然や地域との関わりをテーマにした活動に取り組んできた。このような背景の中, 平成22年度にユネスコスクールの認定を受け, 教育活動全体の中にESD(持続発展教育)の視点を位置付けることになった(浅井, 2010)。

開校以来「笑顔いっぱい, 夢いっぱい, 元気いっぱい」のスローガンのもと, 共生を目指し将来にわたって持続可能な社会を形成できる人間の育成を重点に置き, 日々教育活動に取り組んでいる。まず日本の大切な文化である「MOTTAINAI」の精神風土を醸成していきたい。そして, 3Rを中心とした省エネの大切さ,

循環型社会の必要性に気付かせ, 地球に住む一員としてできることは何かを把握させ実践させていく。さらに, 友達や家庭, 地域の人たちと共に生きるために, 感謝や尊敬の念をもちながら生活していく態度や心情を育てる(山村, 2010)。さらに外国の人たちとの交流をととして, 戦争のない平和な社会を築く上で必要な, 異文化を受け入れられる態度や心情も育てたいと考えている。

2. 研究の概要

(1) ESD(持続発展教育)への理解

～校内での共通理解事項～

■ESDとは■

持続可能な社会の実現をめざし, 私たち一人ひとりが, 世界の人々や将来世代, また環境との関係性の中で生きていくことを認識し, よりよい社会づくりに参画するための力を育む教育である。

* 本論文は, 第41回(2012(平成24年)年度)「現下教育に関する論文の公募(主催:公益法人日本教育公務員弘済会宮城支部)」に, 跡部英行「自然や環境, 地域, 人との関わりの中で, つながりを広める学習活動のあり方」として応募し, 入選したものであるが, 他誌には掲載されていないので, 修正を加えてここに掲載した。

** 黒川郡富谷町立日吉台小学校 教諭, *** 宮城教育大学附属環境教育実践研究センター



- ・学習者がみずからの価値観を見つめ直し、再構築できるような教育
- ・自分の考えに基づき、主体的な行動を起こすことにつながる教育



■ E S Dがめざす「人」づくり ■

- ・自然との共生や多様な立場を尊重できる考え方をもつ
- ・問題解決能力に富み、よりよい社会づくりに参画する

(2) カリキュラムの再構築（総合的な学習の時間を中心に）

(1) E S Dの考え方の導入

本校では、総合的な学習の時間の中で自然・地域等をテーマとして、例えば3・4年生の「身近な環境を調べよう」、5年生の「お米ワールド」、6年生の「縄文時代について知ろう」を中心に取り組んできた。ユネスコスクール加盟を機に、E S Dの考え方を取り入れ、総合的な学習の時間を中心に、今までの実践の再構築を行う。

(2) 子どもたちに付けたい資質能力

子どもたちに育みたい資質能力についても、E S Dの考え方を取り入れて明らかにしてきた。これまで行ってきた総合的な学習のテーマをもとにして、「自然」「エネルギー（環境）」「共生（地域・国際理解）」「エネルギー（環境）」の3領域を設定し、これらの学習活動をととして、以下の資質能力を付けていきたいと考える。

○関心・意欲・態度として

- ・主体的、創造的、協同的に取り組む態度
- ・課題発見力

○情報収集力・課題追求力として

- ・学び方やものの考え方 ・人との関わり方

○表現力として

- ・相手意識を持って伝えること

○自己の生き方・絆づくりとして

- ・地域とのつながりを意識すること
- ・自分には何ができるのかを考え行動すること

(3) E S Dの考え方を取り入れたカリキュラムの再構築

(1) 価値ある教育資源の教材化

校地内に以前からあった素材を見直し、例えば近くにある「ゆめのもり」を利用して「バタフライガーデンの維持活動および観察」を中学年の学習題材を取り入れる等、カリキュラムの再構築を行う（気仙沼教育委員会（2010）を参考）。

(2) 教材開発でのプランニング

グリーンカーテン、エコランタン・ページェント等、新たに教材化する場合、学びのプロセスとして、子どもが実際に体験することや地域の方々とふれあうことを大切にする。

(3) 各教科との関連

新学習指導要領の趣旨を踏まえ、総合的な学習の時間と各教科との関連を重視し、E S D・ユネスコスクールの指導計画を作成する。

■これまでの総合的な学習の時間の各領域および目標■

自 然：身近な自然について理解と愛着をもち、自然と共に生きていこうとするとともに、自分にできる方法で環境の保全や望ましい環境を作る資質や能力を育てる。

地 域：自分たちが暮らす地域の歴史、伝統、文化、生活習慣、産業などについて理解と愛着をもち、構成員の一人としてよりよい地域を創る資質や能力を育てる。

パルタイム：教科の学習を発展・統合し、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題解決する資質や能力を育てる。

← E S D（持続発展教育） { の考え方
の学びの方法

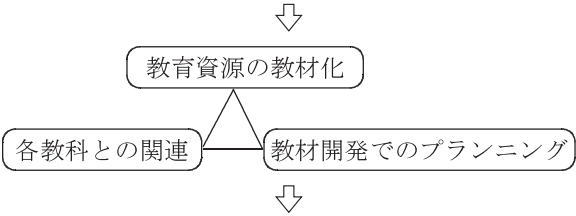
<本校のE S D・ユネスコスクールの目標>

持続発展的な社会を作っていくために、人や社会とかわる中で、集団や社会の中で果たすべき自己の役割を考えさせながら、よりよい生き方を学ぼうとする意欲や態度を育成する。

■ 学年部の指導目標 ■

低学年	自然の美しさや地域の人々のすばらしさを五感で感じ取ったり、自分と自然や環境、地域とのかかわりに気づいたりする力を育てる.
中学年	自分と自然や環境、地域とのかかわりに気づいたりする力を育てるとともに、環境・地域とそれに関わる問題や人間と環境の調和について、様々な経験をととして、基本的なことを理解する力を育てる.
高学年	自然・環境・地域とそれに関わる問題や人間と環境の調和について、様々な経験をととして、基本的なことを理解する力を育てるとともに、環境や地域に対する感性をもって、自然・環境を守り、改善し、持続させようとするような態度や感性を育てる.

	共生（地域・国際理解）
低学年	校内行事等をととして、地域の方々と触れることによって、よさに気付くことができる.
中学年	地域の施設、行事や文化などの特色に触れることによって、よさに気付くことができる.
高学年	地域の歴史や文化などの特色に触れることによって、よさに気づき、積極的に関わりをもつことができる.



■ 各領域ごとの学年部の評価基準 ■

	自 然
低学年	校地内の自然に触れ、気付いたことや感じたことを大切にできる.
中学年	地域の自然に触れ、気付いたことや感じたことを大切にしながら、自然に働きかけていくことができる.
高学年	地域の自然に触れながら、環境と自分たちの生活との関わりを理解し、積極的に自然に働きかけることができる.

	エネルギー（環境）
低学年	活動をととして、環境に対する豊かな感受性をもつことができるようにする.
中学年	活動をととして、環境に関して、持続可能な社会の構築につながる見方や考え方をはぐくむようにする.
高学年	活動をととして、持続可能な社会の構築に向けて、将来においてもよりよい環境を創造するための働きかけをすることができる実践力も培うようにする.

■ H24 ESD・ユネスコスクール年間指導計画 ■

分野	自然	エネルギー（環境）	共生（地域・国際理解）
4月	ゆめのもりの観察 ○中学年・理科・総合 学校園と外の学習と維持活動 ○低学年・生活科 ○中・高学年・理科 パタフィガーデンの維持活動および観察 ○3年生・理科 ○中・高学年・総合		異学年交流 ・1年生と2年生、1年生と6年生の交流 ・朝礼と時間表は必要に応じて、以下のように確保する。 1年生と生活科・総合と生活科・総合・総合・総合・総合 ○新学年始まる前（1年生と6年生） ○1年生と生活科（1年生と6年生） ○生活科（1年生と6年生） ○2年生と生活科（1年生と6年生） ○3年生と生活科（1年生と6年生） ○4年生と生活科（1年生と6年生） ○5年生と生活科（1年生と6年生） ○6年生と生活科（1年生と6年生） スクールボランティアさんとの対面式 ○全学年・学校行事
5月	お楽しみワールド ○3年生・総合 お楽しみワールド ○3年生・総合	グリーンカーテンの学習と維持活動 ○低学年・生活科 ○中・高学年・総合	富貴のグループ（1） ○3年生・総合
6月		電気の見える化活動 ○全学年・全領域	あつたクラブ（地域ボランティアの方と） ○4～6年生・クラブ
7月		リサイクル、水について考えよう ○4年生・総合	A12の交流（異学年交流も含む） ○2年生・生活科・5年生・総合
8月			
9月		エコについて考えよう ○5年生・総合	
10月			
11月		エコランガ・ページェント ○低学年・生活科 ○中・高学年・総合	
12月			書のおそびをしよう（地域の方と） ○1年生・生活科
1月		明かりをつけよう ○3年生・6年生・理科	環境の取組を推進しよう（スクールボランティアさんへの感謝の集い） ○5年生・総合
2月			A12の交流（異学年交流も含む） ○2年生・生活科・5年生・総合 A12の交流 ○1年生・生活科 目の覚めをしよう ○3年生・総合
3月	次年度の年間計画作成		

3. 各領域における実践例

(1) 自然

1) 身近な自然を調べよう

＜3年関連：総合、理科＞

- ①校庭で春の様子を観察（4月）
- ②新緑のゆめのもりの観察（5月）
 - ・学校隣の町有林地を観察する。
- ③バタフライガーデンの観察（6, 8, 9月）
 - ・校地内の樹木に集まる蝶を観察する。
- ④秋のゆめのもりの観察（10月）
- ⑤蝶を呼ぶための植林活動（図1）（11月）
 - ・多くの蝶を集めるための植林をする。

- ⑥冬のゆめのもりの観察（12月）
- ⑦春のゆめのもりの観察（3月）

各学級ごとに、校庭周辺や中庭及びその周辺にどんな蝶がいるか観察させるところ、近隣の学校に比べ、緑に恵まれて

いるため、予想以上に蝶がいることが分かった。

次の段階で、ゆめのもりにさらに蝶を呼ぶには、どんな活動を行えばよいか子どもたちに考えさせた。様々な意見が出たのだが、結論として、蝶が来やすくなる環境にすればよいとなり、それには蝶が卵を産んで幼虫のえさとなる植物が必要という考えに至った。そのためには、どうするかと問い、樹木を植える必要があるという意見で一致した。

宮教大の溝田浩二准教授のご指導をもとに、苗木を植樹した。当初、中庭及びその周辺付近に植樹する予定だったが、休み時間など、授業以外の時間帯でも、自然に蝶を観察できる環境を作った方が効果的であると考え、校庭の周辺を中心に植樹することにした。

子どもたちは協力しながら、大事そうに苗木を扱いながらいねいに植えていた。自分たちで植えた苗木はもちろん、その他の植物も大切にしてい



図1. 植林活動

持ちが芽生えてきたようだ。

2) お米ワールド

＜5年関連：総合、社会＞

①田植え（図2）

（4月下旬～5月上旬）

- ・指導員さんに田植えについての話を聞く。

- ・田植えの仕方を調べ、田植えをする。

②米についての調べ学習（5月下旬）

- ・図書室、インターネットの活用をして調べる。

③田の観察（6～9月）

- ・田や稲の成長の様子を継続観察する。

④稲刈り（図3）（10月上旬）

- ・刈る、束ねる、運ぶ、掛けるの流れを、指導員さんの指導を受けながら行う。

⑤収穫したもち米の販売（12月）

⑥指導員さんへの感謝の会（2月上旬）



図2. 田植え



図3. 稲刈り

本校では、ユネスコスクールの認定を受ける前から、5年生の総合的な学習で「米作り」を行ってきた。その活動に、E S Dの考えを取り入れ、環境と食糧生産との関係をより詳細に学習する機会としてきた。さらに、日吉台地区での米作りの体験をもとに、米の生産が国民の食料を確保する重要な役割を果たして国民の食生活を支えていること、米の生産は自然環境と深いかわりをもって営まれていることや、米の生産に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸などの働きを理解し、国民生活を支える米の生産の発展について考えさせてきた。

(2) エネルギー（環境）

1) グリーンカーテンの整備と維持活動

＜全学年関連：総合，生活，理科＞

- ①各クラスごとにプランターの整備（5月下旬）
 - ・ベランダへにプランターの移動と土入れ，ゴーヤの苗植え，水やり等を行う。
- ②各クラスの網掛けセッティング（6月上旬）・ゴーヤが根付いた頃に行う。
- ③維持管理の継続（6月上旬～9月下旬）
 - ・グリーンカーテン（図4）の効果を考える。
 - ・ゴーヤチャンプルー作り（図5）をする。



図4. グリーンカーテン



図5. ゴーヤチャンプルー作り

地球にやさしい生活をめざして，地域の方々の協力を得ながら「グリーンカーテン」づくりを行い省エネルギーに取り組むとともに，グリーンカーテンの効果など活動から学んだことを地域に発信し，地域ぐるみで持続可能な社会を実現しようとする意識の高揚を図ることを目的に行ってきた。

この活動を通して，省エネの効果を実感することができた。また，教室のすぐ外といった身近に自分たちが育てているゴーヤ等があることで，植物に対する愛情が一層深まった。さらに，自分たちが育てたゴーヤを使った調理をすることにより，収穫の喜びを味わうことができた。

2) エコランタンページェント

＜全学年関連：総合，生活，理科＞

- ①事前指導（11月中旬）
 - ・エコについて考える。
- ②事前準備（11月下旬）
 - ・エコランタン，エコキャンドル作り
 - ・6年生が中心となって，地域への消灯協力の呼びかけをする。

③エコランタンページェント（図7）実施（12月上旬）

- ・地域の方々に参加を呼び掛け，ミニコンサート（図8）を開く（6年生）



図7. エコランタンページェント



図8. ミニコンサート

学活や総合的学習の中で，全学年各学級ごとに，電気の省エネルギー等，身近なエコについて考えさせる時間を取った。3～6年生のエコランタン作りは，地域の方々のご指導ご協力で，大変スムーズに行うことができた。1，2年生にはエコランタン作りは難しいため，エコキャンドルを作って，エコランタン・ページェントに備えた。

エコランタン・ページェントの当日のセッティングは全職員と子どもたち，参加した保護者で行った。寒かったものの，風もなく穏やかな夜で，6年生による「エコランタン・ページェント」ミニコンサートを開き，このイベントに花を添えた。

E S Dの取り組みの一環として，空き缶・ろうそく等の再利用，省エネルギー（電気）について考える・訴える，さらに，この取り組みを家庭や地域に発信することで，家庭生活の中での3 Rの取り組みを考える機会となった。

(3) 共生（地域・国際理解）

○スクールボランティアさんとの関わり

＜全学年関連：総合，生活，クラブ活動＞

- ①対面式（4月上旬）
 - ・1年間お世話になるスクールボランティアさんとの顔合わせをする。
- ②登下校時の交通安全指導（図9）（通年）
- ③図書ボランティアさんによる，年8回の読み聞かせ（図10）（通年）
- ④あったかクラブ（通年）
 - ・クラブ活動に地域ボランティアさんに入ってもらい，一緒に活動する。（H 24：料理・

手芸・パソコンの3クラブ)



図9. 交通安全指導



図10. 読み聞かせ

⑤感謝の会（図11）（1月下旬）

- ・ 1年間お世話になったスクールボランティアさんを招待し，感謝の会を開く。
- ・ 収穫したもち米を使った料理をふるまい，5年生が中心となって開く。



図11. 感謝の会

スクールボランティアさんとの関わりの活動のまとめとして，暑い日も寒い日も，雨の日も晴れの日も，いつも子供たちの登下校の安全を見守ってくださったスクールボランティアの方々に，学校を代表して感謝の気持ちを伝えよう，喜んでもらおうという思いをもって感謝の会を開いた。

子供たちは，一生懸命に歌や合奏の練習し，発表しました。飾りを作って会場をきれいに飾り，自分たちが田植え・収穫したもち米でお汁粉を作り，振舞った。感謝の気持ちを込めた手紙を書いた。そして，スクールガードリーダーの方々に，これまでの感謝の気持ちを伝えるために，喜んでもらうために，一人一人がしっかり取り組むことができた。

4. おわりに

平成22年3月に，ユネスコスクールの認定校になったことを受け，全教職員で，各教科・領域等，教育活動全体をE S D（持続発展教育）の視点で見直してきた。その結果，カリキュラムの再構築に取り組む中で，総合的な学習の時間をはじめ，生活科，理科，社会，学活，児童会活動，学校行事など，E S Dはほぼ日吉台小学校の教育活動全般に関わるものが改めて明らか

となった。

この作業の中で，常時活動としては，バタフライガーデンやグリーンカーテンの整備と維持活動，児童を主体とする電気の「見える化」活動等が生まれた。さらに，地域に小学校の活動を発信していく「エコランタンページェント」を行うことになるなど，新たな教育資源の発見，開発ができた。

このような教育活動を行っていく中で，単元とその活動内容にもよるが，子どもの課題設定能力や実践力が高まったことが，指導者として心の底から実感できたことが大きな成果である。

バタフライガーデンやグリーンカーテンの整備と維持活動，エコランタンページェント等，活動継続のための予算は「学校&みんなのプロジェクト」や「ユネスコ・スクール ESD アシストプロジェクト」協力校に認定された助成金でまかなってきた。しかしながら，今後，それらがなくなった時，予算をどのように確保していくかが第一の課題である。

上記の教育活動をしている中で，現在在籍している教職員間では，E S Dに対する理解と認知度はほぼ一致していると考えられる。とはいっても，今後，活動の中心となっていた教職員異動によるE S D活動の停滞や，転入職員との認知度の差が懸念されることが，第二の課題である。

以上，日吉台小学校のE S Dを継続させていくための，具体的な方策を早急に講じていく必要があると考える。

謝辞

宮城教育大学環境教育実践研究センター島野智之准教授の初期支援から発展し，同溝田浩二准教授よりバタフライガーデン構築の指導を受けたことに基づいて実践研究を行った。「平成22年度学校&みんなのプロジェクト」「第2期（平成22年），第3期（平成23年）ユネスコ・スクール ESD アシストプロジェクト」から活動費の助成を受けた。

引用文献

浅井孝司，2010. 持続発展教育（E S D）とユネスコスクールについて。In: 社会責任に関する円卓会議

第3回人を育む基盤の整備WG学習会資料, 文部科学省(編), 東京都. pp. 3-12.

気仙沼市教育委員会, 2010. 気仙沼市のE S D (環境教育) カリキュラムの視点. *In*: 環境教育を基軸としたE S Dカリキュラムの開発と実践, 気仙沼教育

委員会(編), 気仙沼市. pp. 14-20.

山村薫, 2010. 地域の文化や人との絆をつなぐ. *In*: 石川の学校教育振興ビジョン実践事例発表大会紀要, 石川県教育委員会(編), 石川県. pp. 22-25.

